

British Periodicals で見える、19 世紀の英国文化

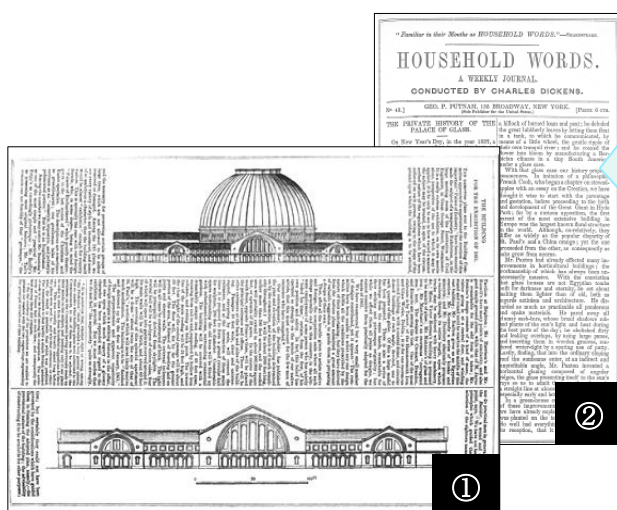
～美術と建築1 「水晶宮」～

[British Periodicals \(BP\)](#) は、17 世紀から 20 世紀初頭にかけて英国で刊行された定期刊行物 約 470 誌を収録するデータベースです。本稿では、BP が提供する多種多様な雑誌の中から、大英帝国の絶頂を象徴する一大イベント、第一回ロンドン万国博覧会の会場として建設された「水晶宮(Crystal Palace)」に関する記事をご紹介します。

◆万博会場設計の混乱とJ.パクストン◆

万博会場の設計をめぐっては、大きな混乱がありました。会場案ははじめ公開コンペティションで募られましたが (①Art journal, 1850)、しかし 245 点の応募案のいずれも採用には至らず、それにかわって万博建築委員の手になる設計図が発表されたものの、その外観と莫大な工費が世間の批判を浴びて万博は会場設計の段階で暗礁にのりあげていました。

それを知った技術者ジョセフ・パクストンが独自に設計図に着手したのは、万博開催まですでに 11 か月を切った時期でした。パクストンが彼の水晶宮の案を万博実行委員会へ電光石火のごとく持ち込んで建設実現にこぎつけたドラマチックな経緯を、C.ディケンズが主催した雑誌、Household Words が活写しています (②,1851)。

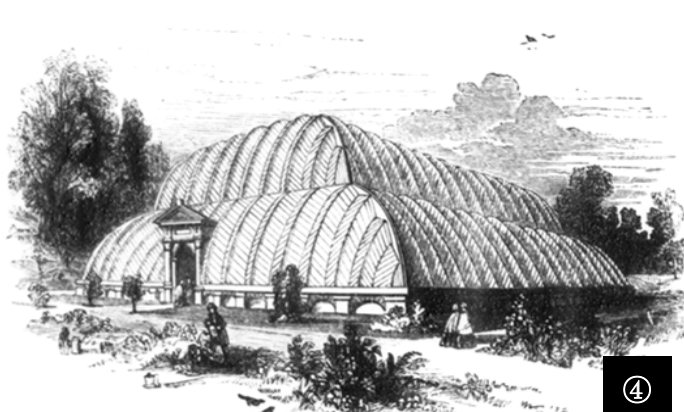


「これまでの案の千倍良い！」

(水晶宮のプランをもってロンドンに向かおうとしたパクストンは、偶然にも万博実行委員のメンバーであるスティーブンソンと同じ汽車に乗り合わせた)

「なんという幸運！ちょうど私の案を説明したかったんだ！」パクストン氏は叫んだ。…「遅かったね、もう全部決まってるんだ」「じゃあ見るだけ見てくれよ。腹ペコなんだ。夕飯を食べている間に見てくれれば黙ってるから。」…とうとうスティーブンソン氏は書類をまとめると、それを向かいの座席に放って叫んだ。「すばらしい！チャッツワースの壮大さに匹敵するよ！これまでの案の千倍良い！もっと早くこれが出ていれば！」

パクストン (③London journal, 1851) は造園から橋梁や貯水池、ガス工場、鉄道敷設まで、多方面で活躍した技術者です。彼が 1840 年代に手掛けたチャッツワースの大温室は独自の構造をもつ画期的な温室で、水晶宮の原型となりました (④Art journal, 1852, ⑤Leisure hour, 1853)。



◆6 か月間で竣工、万博開催へ◆

パクストンが水晶宮の案を公表するや、鋳鉄とガラスの斬新なデザインが世論の支持を得て、水晶宮は正式に万博会場案として採用されました。パクストンが工場で生産した規格化された構造材を現場で組み立てる、現在でいうところのプレハブ方式を取り入れて、幅約 560m、奥行き約 120m、高さ約 30m に達する巨大な建物を 6 か月という短期間で完成させることに成功しました。

1850 年 12 月 23 日のヴィクトリア女王の日記には、水晶宮の工事の様子が記されています。

Queen Victoria's Journals

ヴィクトリア女王の日記をデータベースで



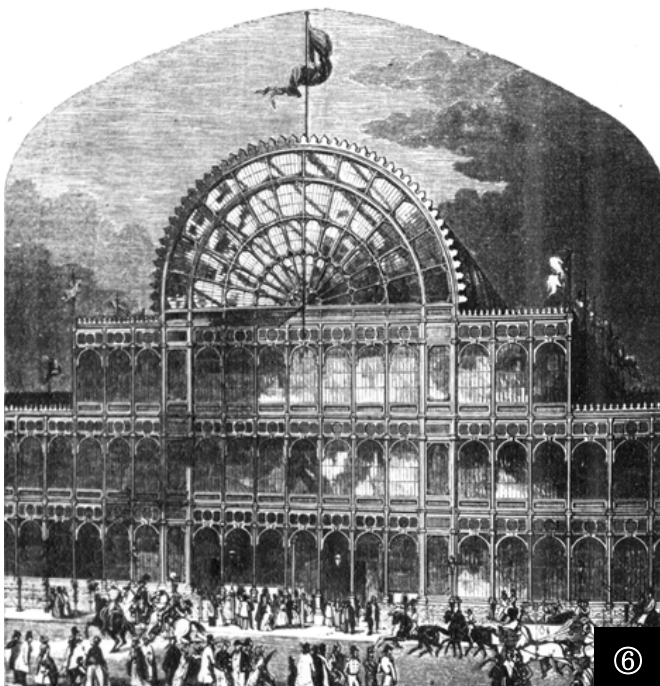
「およそ想像を絶している」

10 時にハイドパークの万博の建物へ馬車で直接向かった。すべてのものがますます巨大に、素晴らしくなっていて、それぞれに壮大で本当に見事で、およそ想像を絶している。ガラスはほとんど張り終わっていた。大勢の作業員のたてる物音は言葉では言い表せないほどの騒がしさだ。木材や桁や木製の飾りが、あちこちへと荷車で運ばれていた。この建物が完成したらさぞや輝かしいものになるだろう。解体せずこのままにしておこうという世論が出るに違いない。パクストン氏ら委員の面々も揃っていた。ロンドンは霧が出ていて、建物の端からは向こうの端が見えないほどだった。24,000 人（原文ママ）の作業員が雇われているが、会場を去るときに彼らは列をなして私たちに歓声を送った。それからひどい風邪をひいている可哀そうなおばを見舞い、ウィンザー城に戻ったのは 1 時だった。

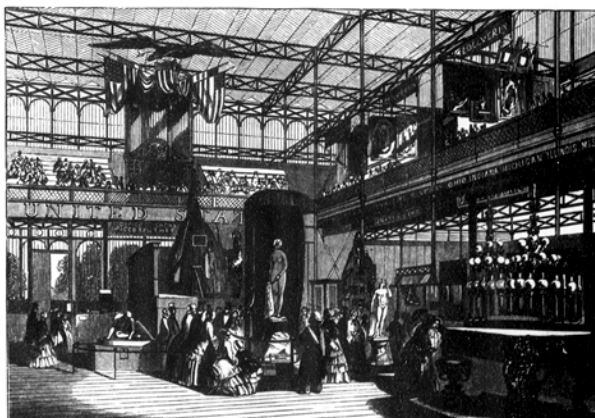
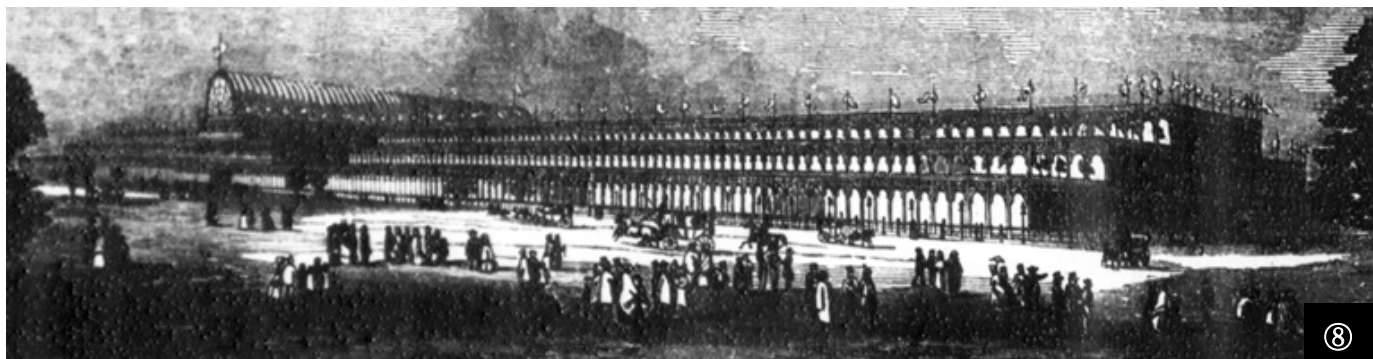
Queen Victoria's Journals は、ヴィクトリア女王が少女時代から書き始め、その死の直前まで 70 年近く書き続けた日記のデータベースです。詳細はお問い合わせください。

※British Periodicals とは別にご契約が必要です。

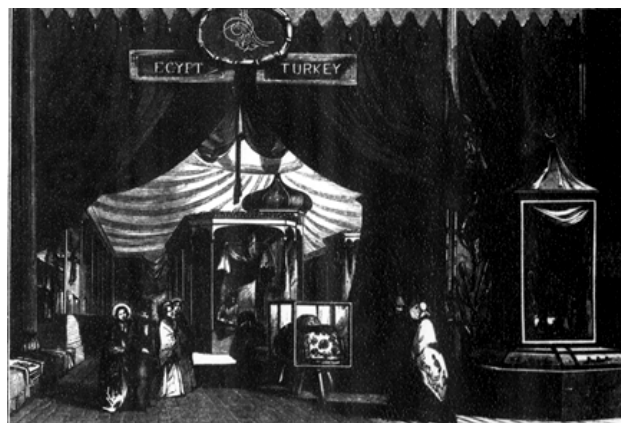
万博の発案者で実行委員でもあったアルバート公の支援を受けていた雑誌、Art Journal は、竣工に先立つ 1851 年 1 月に水晶宮の様子を詳細に伝える特集記事を掲載しています（⑥～⑩）。ガラスと鉄の巨大な空間のもたらす開放感は市民を魅了し、会場建築それ自体が万博の目玉の一つとなりました。



水晶宮の呼び物の一つに、楡の巨木とその前にしつらえられた「水晶噴水」がありました(⑦)。この楡の木はもともとその場所に生えていたもので、万博会場のためにこの巨木を切り倒すことに市民の強い反対の声があがり、一時は万博開催自体が危ぶまれるほどでしたが、パクストンは水晶宮に半円形の屋根をつけて室内に木を囲い込むことでこの問題を解決しました。



⑨アメリカの展示



⑩トルコ・エジプトの展示

◆解体と再建◆

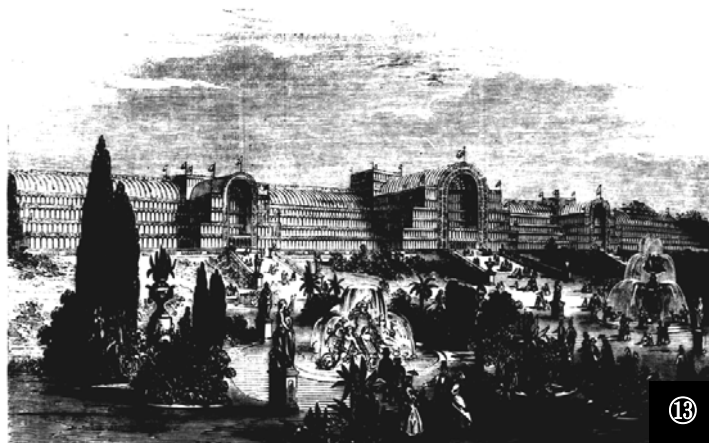
万博は1851年5月1日に華々しく幕を開け、同年10月11日まで141日間にわたって開催されました。そして、その会期中には既に、万博閉幕後に水晶宮をどうするべきかという議論がはじまっていた(⑪ London Journal, 1851)。



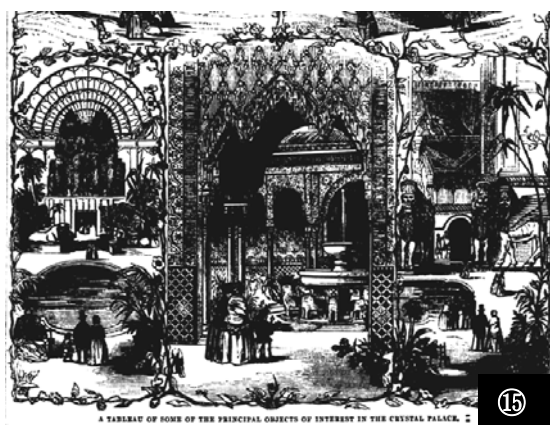
「文明の時代にふさわしくない蛮行」

女王の開幕宣言とともに、連日かつてないほどの群衆が会場を訪れた…産業と芸術の革新的な試みに、誰もが新しい貿易の幕開けを感じ取った。…しかし今や、水晶宮に新たな問題が生じている。我々の誇りともいべきこの美しい建物は、将来のためにこのままに残し、別の催しに使うべきだろう。この建物と内部には総額で12万ポンドがかかっており、失うにはあまりに高価だ。しかし王立万博委員と公園管理局が現在結んでいる規約では、この建物は取り壊されてしまうのだ！12万ポンドもかけて建設された市民の宮殿、欧州最大級の建物を粉々にするというのだろうか？誇るべき文明の時代にふさわしくない蛮行である。

政府が水晶宮取り壊しに傾く中、パクストンは自ら「水晶宮カンパニー」という会社をたちあげて、ロンドン郊外のシデナムに水晶宮を拡大再建するための資金を募りました。当時もっともよく読まれた雑誌の一つ、London Journal は、再建工事や開業の準備の様子を詳細に紹介しています (⑫ London Journal, 1853)。



1854 月 6 月、ヴィクトリア女王臨席のもと、新しい水晶宮は華々しくオープンしました。移築にともなって建物が拡大されたばかりではなく、巨大な給水塔が南北に建てられ、前庭を噴水が飾りました。屋内にはパクストンの買い集めた熱帯植物が茂り、世界の様々な人種や家屋、先史時代の動物の模型が飾られ、また「美術の殿堂」では、世界各地から集められた美術品を見ることができました (⑬⑭ London Journal, 1852, 1854, ⑮Leisure hour, 1865)。世紀後半には、水晶宮はコンサート、教養講座、フラワーショーなどの展示会、集会や花火大会といった様々な催しものの会場としての性質を強めていきました (⑯, London society, 1869)。



パクストンは下院議員として都市整備に尽力し、1865 年にシデナムで没しました。その翌 1866 年、失火により水晶宮の北翼が焼け落ち、貴重な植物や美術品の多くが灰燼に帰します (⑰Fun, 1867)。消失部分は再建されたものの水晶宮カンパニーの経営状態は振るわず 1909 年に破産、この建物は国家の所有となりましたが、1936 年に再度の火事で焼け落ち、現在はわずかに痕跡が残るのみです。

掲載の商品・サービスに関するお申し込み、お問い合わせは、株式会社 紀伊國屋書店 電子商品営業部 (電話:03-6910-0518、ファクス:03-6420-1359、e-mail:online@kinokuniya.co.jp) までお願い致します。お預かりした個人情報は、弊社規定の「個人情報取扱方針」<http://www.kinokuniya.co.jp/06f/gaiyo6.htm> に則り、取り扱わせて頂きます。